

参考資料 I

調査事例の概要



## 1. 札幌コンサートホール(Kitara)

### ● ホールの全景



### ● ホールの概要

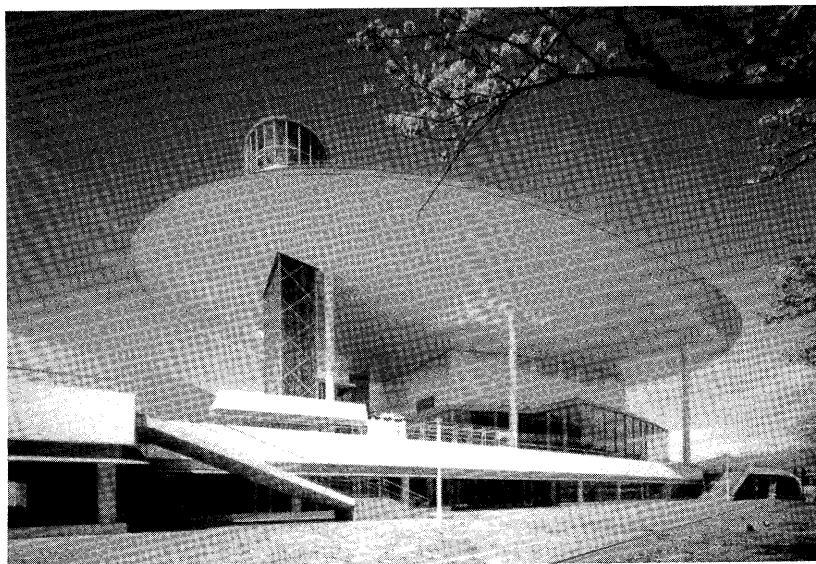
施設名	札幌コンサートホール(Kitara)			
所在地	〒064-8649 札幌市中央区中島公園1-15			
TEL/FAX	TEL: 011-520-2000 / FAX: 011-520-1575			
運営母体	(財)札幌市芸術文化財団			
立地都市の人口	181万3,442人			
施設構成・規模	ホール施設	大ホール(2,008席) : 音楽専用、アリーナ型 小ホール(453席) : 音楽専用、シューボックス型		
	その他施設	リハーサル室(3室)、クローク、カフェコーナー ショップ(チケットセンター、グッズコーナー) 託児室、レストラン(テラスレストラン Kitara)		
	敷地面積	211,740㎡	駐車台数	なし(関係車両用:73台)
	建築面積	8,385㎡	延べ床面積	20,746㎡
	総事業費	190億6,782万円	建設工事費	175億7,593万円
年間自主事業費	5,000万~1億円未満	自主事業公演数	30本以上	
総スタッフ数	37名	新規採用者数	3名	
基本理念	<ul style="list-style-type: none"> <li>「音楽芸術の市民への積極的な提供と支援」、「市民参加による文化の街づくり」、「国際交流による札幌独自の音楽文化の創造」、「地域間交流による文化のネットワーク」、「市民に親しまれるホール運営」の5つをホール全体の基本の方針とする。</li> </ul>			

## ● ホールの計画づくりの概要

<p>検討開始から 開館までの プロセス</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>92年 3月:「札幌市芸術文化ホール建設基本構想」策定</li> <li>92年 8月:「札幌市音楽専用ホール建設基本計画」策定</li> <li>92年10月:「札幌市音楽専用ホール設計競技」実施</li> <li>94年 8月:建設工事着工→97年 2月:竣工</li> <li>97年 7月:開館</li> </ul>
<p>設計者の選定と 設計の進め方</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「音楽専用ホール建設専門部会」での検討結果を踏まえて、市文化部内で計画づくりを行ない、コンペ準備の段階で市建築部が加わり、これらのメンバーにより設計競技要綱が作成された。</li> <li>設計者の選定にあたっては、審査委員が事前の書類審査(実績、類似施設の経験の評価)で設計事務所6社に絞り、指名設計コンペを実施した。</li> </ul>
<p>設計者</p>	<p>北海道開発コンサルタント㈱</p>
<p>運営方法の検討 運営体制の整備</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>運営体制については、建設の発注と並行して、オープン2年前から検討を開始した。外部の専門家等の手は借りず、すべて担当部局(文化部)で検討した。</li> <li>ホールが主催する自主事業の企画検討組織である企画委員会は、行政の担当者と学識経験者で組織した(この企画委員会は現在も継続)。</li> <li>運営は、既存の(財)札幌市芸術文化財団に委託。この財団では、札幌市内5つの施設を管理・運営しており、3つの事業部がおかれている。</li> <li>札幌コンサートホールの開館にあたり、財団では新たにプロパーの職員を3名採用した。</li> <li>ホールの友の会組織「Kitara Club」をつくり、ホールの事業に係る情報を提供している。また、会員の中からボランティアを募り、広報、見学会案内等の協力を仰いでいる。</li> </ul>
<p>開館記念事業</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>札幌市と関わりの深い、PMF、札幌交響楽団といった要素を活かした開館記念事業を行なう方針とした。そのため、PMFの開催時期に照準を合わせ、開館記念事業を開催、独自のオープニング事業との相乗効果を期待した。</li> <li>開館当日、14:00～落成記念式典(記念演奏)、19:00～こけら落としコンサートを実施。さらに、オープン記念コンサートとして、1週間にわたり、札幌交響楽団演奏会(大ホール)、オルガンリサイタル(大ホール)、PMF ウィーン弦楽四重奏演奏会(小ホール)、邦楽の世界(小ホール)が行なわれた。</li> </ul>
<p>計画づくりにおける 特徴・課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>札幌市は、もともと札幌交響楽団の活動をはじめ、PMFの継続開催、更にアマチュアオーケストラ、合唱、吹奏楽等の活動を通して、クラシック音楽に対する市民の関心も高く、ソフト先行型だった。また、民間の音楽事務所、放送局等によるクラシックコンサートの供給も盛んであったため、音楽専用ホールをつくることに対して、利用者、ニーズが明確であった。</li> <li>市文化部内にPMFをはじめとする音楽事業経験の積み重ねがあったこと、若手担当者に計画づくりを任せたことが成功に繋がっているだろう。</li> <li>ソフトづくりを行なう人材の確保、育成が今後の課題。</li> </ul>

## 2. 桐生市市民文化会館

### ○ ホールの全景



### ○ ホールの概要

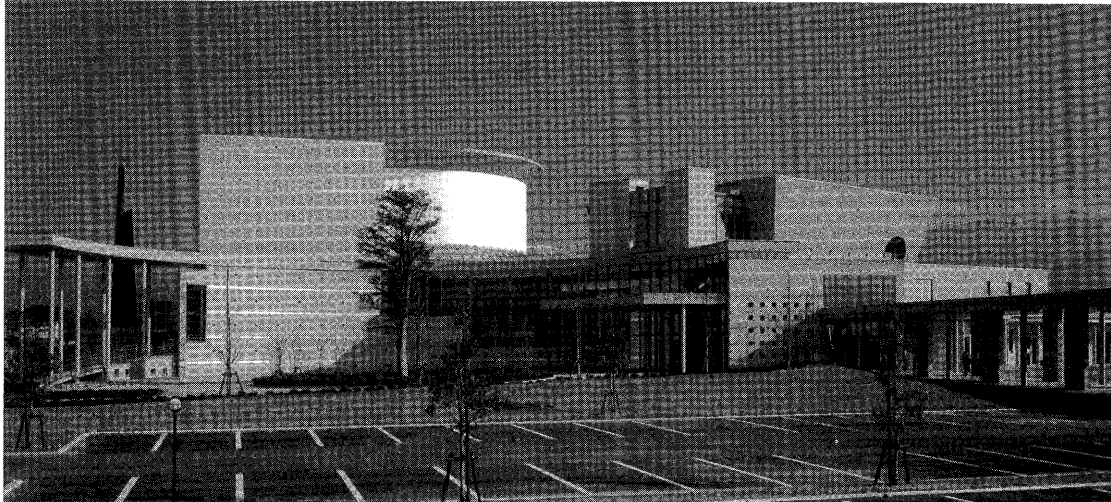
施設名	桐生市市民文化会館			
所在地	〒376-0024 群馬県桐生市織姫町2-5			
TEL/FAX	TEL: 0277-40-1500 / FAX: 0277-46-1126			
運営母体	(財)桐生市市民文化事業団			
立地都市の人口	11万8,419人			
施設構成・規模	ホール施設	シルクホール(1,517席):多目的、プロセニウム+昇降可変式音響反射板 小ホール(310席:センターステージ形式時):多目的、ステージ形式可変		
	その他施設	リハーサル室(2室)、練習室(2室)、展示室、レストラン、情報コーナー 学習・練習室(音楽練習室、ダンス練習室、アトリエ、AV編集室) スカイホール、会議研修室(会議室、国際会議室、和室)		
	敷地面積	28,000㎡	駐車台数	550台
	建築面積	7,608㎡	延べ床面積	18,215㎡
総事業費	141億5,467万円	建設工事費	130億4,622万円	
年間自主事業費	5,000万~1億円未満	自主事業公演数	11~30本	
総スタッフ数	19名	新規採用者数	14名	
基本理念	<ul style="list-style-type: none"> <li>芸術文化鑑賞の場、市民文化学習・発表の場、市民がふれ合う交流の場を整備し、ここを拠点とした市民の文化活動を支援・奨励することによって文化振興を図り、それを力として、本市の未来像である「ハイテクとファッションのまち桐生」実現に向けたまちづくりにも結び付けていこうとするものである。</li> </ul>			

## ● ホールの計画づくりの概要

<p>検討開始から開館までのプロセス</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>91年 6月:基本計画検討開始、市議会内に「市有施設設備調査特別委員会」設置</li> <li>92年10月:「(仮称)桐生市市民文化会館建設構想」策定</li> <li>93年 4月:専従組織、「(仮称)桐生市市民文化会館建設室」設置</li> <li>93年 5月:コンペの結果(株)坂倉建築研究所に決定→94年10月:発注、着工</li> <li>95年 7月:財団法人桐生市市民文化事業団設立</li> <li>97年 3月:竣工、シルクホールでテストコンサートを実施</li> <li>97年 5月:市民を対象とした施設内覧会を実施後、開館</li> </ul>
<p>設計者の選定と設計の進め方</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>企画部局が担当となり、建築課、教育委員会の文化振興担当等から人材を集める形で体制を強化し、懇談会で市民から出された様々な要望を取捨選択しながら、行政担当部局内で草案づくり、コンペ要綱作成まで行った。</li> <li>コンペの実施にあたり、(財)日本建築学会関東支部長宛にコンペの審査員を務める学識経験者の推薦を依頼。</li> <li>昭和60年以降5,000㎡以上の文化施設の設計を行なったことのある設計事務所31社に参加の意向を問うアンケートを実施、審査員と市の担当による書類選考で参加希望の24社を5社に絞り、指名コンペを行った。</li> <li>コンペの後、設計事務所と打ち合わせを重ね、メンテナンス面も含めたプラスチックアルファの注文を出した。</li> </ul>
<p>設計者</p>	<p>(株)坂倉建築研究所</p>
<p>コンサルタント</p>	<p>建築音響:橋 秀樹氏(東京大学生産技術研究所 教授) (株)坂倉建築研究所を通じて)</p>
<p>運営方法の検討 運営体制の整備</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>外部コンサルタントの力を借りず、懇談会を設け、教育委員会内に設けられた担当部局(建設室)で、討議結果を特別委員会に諮りながら検討を進めた。</li> <li>現在、財団の職員は19名、うち5名が市からの派遣。</li> <li>技術スタッフはプロパーとして、公募で6名を新規採用。うち3名の経験者の採用にあたっては、論文と専門知識の試験を実施。</li> <li>専門知識の試験は、行政内では知識不足のため公文協の情報プラザに問題の作成を依頼した。前産業文化会館の技術者は継続雇用しなかった。</li> <li>通常財団で設けられている評議員会制度を主体的で自由な組織とするため、「企画運営委員会」という名称にし、自主事業策定のためのワーキンググループとしての機能を持たせている。</li> </ul>
<p>開館記念事業</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>開館の直前、市民を対象とした施設内覧会を実施し、新ホールの市民への周知を徹底するとともに、利用を促した。</li> <li>市の開館記念事業として、財団が市から委託を受ける形で、記念式典(太鼓の打ち初め)、市民による第九の演奏会、群馬交響楽団のガラコンサートが行われた。また、財団独自の開館記念事業として、マゼール指揮のフィルハーモニア管弦楽団のコンサートを実施した。</li> </ul>
<p>計画づくりにおける特徴・課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本事業は、老朽化した既存建物(産業文化会館)の建替え事業だったが、ホールの規模、機能、運営の方式等は旧会館とは大きく変わるもので、実質的には新しくホールを作ることと同じだった</li> <li>多目的ホールとはいえ、できるだけ用途にあわせた専門ホールの機能を持たせるため、国内で数少ない昇降可変式音響反射板を採用。初期費用がかかること、メンテナンスに注意が必要ではあるが、前記目的のためには有効。</li> <li>今後の大きな課題は、財団組織の硬直化(主に人事面)への対応。近隣市町村との広域文化圏で、人事を含めた事業交流ができれば理想なのだが。</li> </ul>

### 3. 黒部市国際文化センター(コラーレ)

#### ● ホールの全景



#### ● ホールの概要

施設名	黒部市国際文化センター(コラーレ)		
所在地	〒938-0031 富山県黒部市三日市 20		
TEL/FAX	TEL: 0765-57-1201 / FAX: 0765-57-1207		
運営母体	(財)黒部市国際文化センター		
立地都市の人口	3万6,706人		
施設構成・規模	ホール施設	カーターホール(886席):多目的、プロセニウム+音響反射板 マルチホール(208席):多目的、平戸間形式	
	その他施設	展示施設(展示室-2室、創作室-2室) 学習ゾーン(会議室、図書室-閲覧20席、相談コーナー、児童コーナー、工芸コーナー、談話コーナー) 日本空間(大広間-28畳、和室・茶室、銀色の茶室、能舞台-300席)	
	敷地面積	37,973㎡	駐車台数 300台
	建築面積	6,736㎡	延べ床面積 8,886㎡
総事業費	66億9,000万円	建設工事費	49億4,000万円
年間自主事業費	3,000~5,000万円	自主事業公演数	11~30本
総スタッフ数	9名	新規採用者数	7名
基本理念	<ul style="list-style-type: none"> <li>21世紀に向け、地域の芸術、文化振興と国際化社会に対応した「国際交流盛んなまちづくり」を目指すため、地域住民が世界の人々との交流や芸術文化を通じて国際理解を深め、国際感覚を高めることができる国際交流の中核施設として国際文化センターを建設した。</li> </ul>		

## ● ホールの計画づくりの概要

<p>検討開始から開館までのプロセス</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 89年 4月:基本計画検討開始</li> <li>• 89年12月:自治省リーディングプロジェクト(国際都市整備)に指定</li> <li>• 92年 8月:(財)日本建築センターへ事業計画策定業務委託、設計候補者選定委員会設置→92年 9月:設計者決定</li> <li>• 92年11月:市職員による検討会設置(～94年3月)→93年4月:専従組織設置</li> <li>• 93年6月:管理運営計画策定を(財)日本建築センターへ委託(～95年3月)</li> <li>• 94年 3月:建設工事着工→95年10月:建設工事竣工</li> <li>• 94年 4月:財団法人黒部市国際文化センターを設立</li> <li>• 94年6～11月:プレイベント実施</li> <li>• 95年11月:開館→96年3月まで使用料を無料で市民に開放</li> </ul>
<p>設計者の選定と設計の進め方</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 市長の「将来有望な若手建築家に依頼したい」との意向に基づき、(財)日本建築センターに選定を依頼。設計候補者選定委員会が設置され、15名の一次候補者から5名に絞り込み、プロポーザル(面接方式)によって選定。</li> <li>• 設計者の「市民の使い方がわからないと設計ができない」という考え方から、基本設計に着手する前に、設計者自身が市民に積極的にヒアリングを実施し、ホールの目的や施設構成・内容等との設計与件を検討・確定していった。</li> <li>• 別途実施された「管理運営計画」の検討結果にあわせ、度重なる設計変更を含め最終的な設計案が固められていった。</li> </ul>
<p>設計者</p>	<p>新居千秋(㈱新居千秋都市建築設計)</p>
<p>コンサルタント</p>	<p>㈱シアターワークショップ、㈱永田音響設計(設計事務所の意見を参考に選定)</p>
<p>運営方法の検討 運営体制の整備</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 設計候補者選定委員会から、ソフトの検討にも予算をかけないという提案を受け、建築設計と並行して、「管理運営計画策定」を(財)日本建築センターに委託(委託費3,000万円)。</li> <li>• その中で建築家、劇場コンサルタント、地元市民等からなる「国際文化センター施設運営企画会議」を組成、詳細な検討とシミュレーションが行われ、現在の運営方法や事業展開のベースが作成された。</li> <li>• その間、事務局スタッフとして、(財)日本建築センター、新居建築事務所、シアターワークショップから各一名が専従で対応。</li> <li>• 現在の運営スタッフ9名のうち7名は財団での新規採用者。公募・採用試験を実施したが、面接には建築家、劇場コンサルタントも対応。全国からの応募者の中からホール運営に熱意のあるスタッフを採用。</li> </ul>
<p>開館記念事業</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• こけら落とし等の開館記念事業は一切行わず、次の3ステップで開館。             <ol style="list-style-type: none"> <li>① 開館2ヶ月は30数回のワークショップ、レクチャーを実施し使い方の見本を提示</li> <li>② 3ヶ月間無料開放して使い方を市民に体験してもらう</li> <li>③ その後レクチャー付きコンサート等を徐々に実施</li> </ol> </li> </ul>
<p>計画づくりにおける特徴・課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自治省リーディングプロジェクト(国際都市整備)に指定され、当初は海外の大学誘致が計画の中心だったが、途中からホール整備が核となる。リーディング・プロジェクトは5年間という長いスパンで計画づくりができるメリットあり。</li> <li>• 設計者、専門家、市民で構成する施設運営企画会議によるソフトづくりと設計作業が同時進行して、市民の意向が盛り込まれ、それが、コラーレ倶楽部や運営委員会という「市民参加型」の現在の運営体制整備に結びついた。計画段階から市民を巻き込んでいたため、議会からの反対もほとんどなかった。</li> <li>• 設計者の新居氏はホール建築は初めてだったが、市民との対話を含め、氏が熱心に取り組んでくれたことも成功要因のひとつ。建築学会賞を受賞。</li> </ul>



## 4. しいの実シアター

### ○ ホールの全景



### ○ ホールの概要

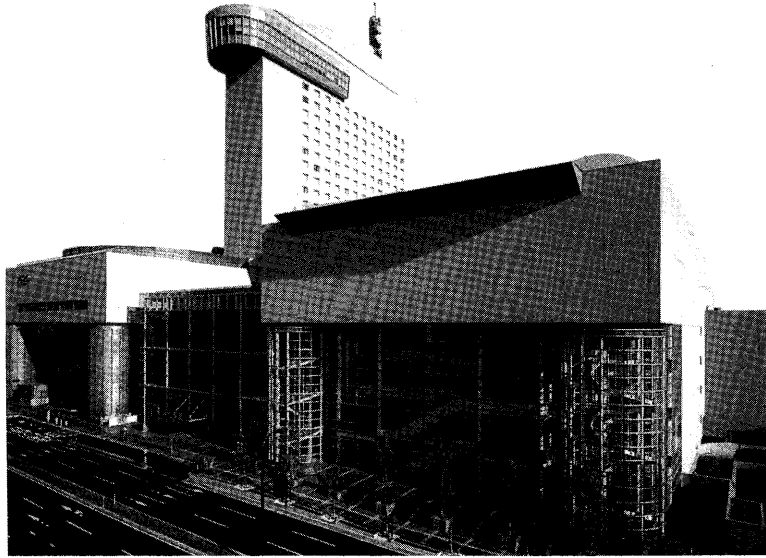
施設名	しいの実シアター			
所在地	〒690-2105 島根県八束郡八雲村平原481-1			
TEL/FAX	TEL: 0852-54-2400 / FAX: 0852-54-2411			
運営母体	八雲村文化協会(劇団あしぶえ)			
立地都市の人口	7,063人			
成規規模	ホール施設	演劇専用劇場(108席)		
	敷地面積	5,249㎡	駐車台数	50台
	建築面積	388㎡	延べ床面積	418㎡
総事業費	3億258万円	建設工事費	1億8,400万円	
年間自主事業費	万円	自主事業公演数	11~30本	
総スタッフ数	2名	新規採用者数	2名	
基本理念	<ul style="list-style-type: none"> <li>恵まれた自然環境の中で、演劇等を通じて村民の文化の向上と情操の かん養を図り、且つ八雲村の演劇文化の拠点として、八雲村林間劇場 を設置する。</li> </ul>			

## ● ホールの計画づくりの概要

<p>検討開始から 開館までの プロセス</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>93年 7月:八雲村林間劇場整備事業が自治省ふるさとづくり事業に指定</li> <li>93年12月:(有)峯建築設計事務所に設計発注</li> <li>94年 6月:建設工事着工→95年5月:竣工</li> <li>95年 3月:八雲村林間劇場設置および管理に関する条例を議決</li> <li>95年 8月:開館</li> </ul>
<p>設計者の選定と 設計の進め方</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>設計事務所の選定は、4社からそれまでの作品資料を提出してもらった上で、競争入札で(有)峯建築設計事務所に決定。</li> <li>仕様については、「劇団あしぶえ」(代表・園山氏)、舞台美術家のアドバイスを受けた。</li> <li>設計者は劇場づくりは初めてだったので、劇場を視察したり、演劇用語や舞台機構について説明を行ないながら、設計が進められた。</li> <li>音響、照明、舞台機構については、それぞれ専門家にアドバイスを受けている。</li> </ul>
<p>設計者</p>	<p>(有)峯建築設計事務所</p>
<p>コンサルタント</p>	<p>劇団あしぶえ</p>
<p>運営方法の検討 運営体制の整備</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>八雲村が劇場のオーナーで、「八雲村文化協会」を設立し、管理・運営を委託している。協会には、村内の文化団体が加入、「劇団あしぶえ」はその加入団体として管理・運営を行なっている。</li> <li>光熱費などの維持管理費は村が負担し、管理・運営にかかる労務部分は、「劇団あしぶえ」団員とサポートスタッフのボランティアによる。</li> <li>99年11月実施の国際演劇祭業務のため、「劇団あしぶえ」の団員1名が八雲村教育委員会の嘱託職員として、演劇祭の仕事に専従している。また、教育委員会の国際文化コーディネーターが、週2回出向という形で、プランニング・通訳等の仕事を行なっている。</li> </ul>
<p>開館記念事業</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「劇団あしぶえ」主管による「星降る里の演劇フェスティバル」を開催、「しいの実シアター」と八雲村社会福祉センター「アルパホール」で5団体が作品を上演した。しいの実シアターでは、こけら落としセレモニーの後、「劇団あしぶえ」による「ゼロ弾きのゴーシュ」が上演された。</li> </ul>
<p>計画づくりにおける 特徴・課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「劇団あしぶえ」は、1964年、現代表の園山氏を中心として松江市で結成、市内に「50人劇場」を構えて活動を続けてきた。</li> <li>「100人劇場」設立を目指して、松江市内で本拠地を捜していたが候補地が見つからなかった「劇団あしぶえ」と、若者が集まる文化の発信拠点を設けて地域活性化をと考えていた八雲村の出会いから、しいの実シアターが生まれた。</li> <li>園山氏をはじめ、劇団員が村に住み着き、地域に根差した活動を展開。</li> <li>計画づくりについては、設計から運営に至るまで、八雲村と「劇団あしぶえ」が連携しながら作業を進めた。</li> <li>99年11月に八雲国際演劇祭を開催、八雲村や松江市をはじめとする全国のサポートスタッフから支援とボランティアを募り実行委員会を結成、成功を収めた。2年後の2001年から本格的開催を目指す。</li> <li>国際演劇祭をはじめとする活動は、規模の小さい八雲村だったから実現できた。</li> </ul>

## 5. 大分県立総合文化センター

### ● ホール(オアシス広場21)の全景



### ● ホールの概要

施設名	大分県立総合文化センター		
所在地	〒870-0029 大分県大分市高砂町2-33		
TEL/FAX	TEL: 097-533-4000 / FAX: 097-533-4009		
運営母体	(財)大分県文化振興財団		
立地都市の人口	123万人(大分県)、43万人(大分市)		
施設構成・規模	ホール施設	グランシアタ(1,966席):多目的、プロセニウム+走行式音響反射板 音の泉ホール(710席):多目的、オープンステージ	
	その他施設	Space Be (リハーサル室、大練習室-1室、中練習室-2室、小練習室-6室、映像小ホール、県民ギャラリー、文化情報ラウンジ) アトリウムプラザ、中会議室(2)、小会議室(4)	
	敷地面積	15,432㎡(複合全体)	駐車台数 300台
	建築面積	12,296㎡(複合全体)	延べ床面積 38,309㎡
総事業費	229億875万円	建設工事費	221億9,537万円
年間自主事業費	2億円以上	自主事業公演数	約20本
総スタッフ数	40名	新規採用者数	19名
基本理念	<ul style="list-style-type: none"> <li>ローカルにしてグローバルな大分文化の創造拠点として、「心ゆたかな人」を育て、「ゆとりある地域」をめざします。</li> <li>県内で行われている多様な文化活動をさらに発展させ、実りあるものにするのが文化ホールの使命です。文化ホールで行われる様々な事業による交流や出会いのプロセス・体験こそが文化の育成につながるのです。「人と人」、「人と文化」、「文化と文化」の交流が「心ゆたかな人」、「ゆとりある地域」を育てます。</li> </ul>		

## ● ホールの計画づくりの概要

<p>検討開始から 開館までの プロセス</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>90年 4月:基本計画の検討開始→92年:県立病院移転跡地再開発計画のための「県立病院跡地高度利用基本構想策定委員会」設置</li> <li>94年 2月:一括事業化提案競技方式での企画案募集→同年7月:F.T.Cグループを選定→95年 4月:実施設計発注</li> <li>96年 2月:財団法人大分県文化振興財団設立</li> <li>96年 4月:建設工事着工→98年 7月:竣工</li> <li>98年 9月:民間部分オープン、同年10月:ホール部分オープン</li> </ul>
<p>設計者の選定と 設計の進め方</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>商業施設、ホテル、NHK 大分放送局との複合施設建設にあたって、「一括事業化提案競技方式」(開発方針から建築計画、運営計画まで含めた事業計画の提案をコンペ方式で選定するもの)を採用。審査委員会を組織し、5グループの提案から、F.T.C.グループ(フジタ、新日本製鉄、日建設計、第一ホテル、梅林組、佐藤組)案を選定した。</li> <li>選定にあたっては建物のシンボル性、施設配置と動線、施設内容、民間施設の賑わいづくりへの寄与や経営計画の健全性などの観点から総合的に審査、選定した。</li> <li>提案競技の後、県の担当部局で、民間事業者や NHK といった共同事業者と話し合いを進めた。</li> </ul>
<p>設計者</p>	<p>(株)日建設計(F.T.C.グループ)</p>
<p>コンサルタント</p>	<p>(株)シアターワークショップ、(株)永田音響設計(設計事務所の意見を参考に選定)</p>
<p>運営方法の検討 運営体制の整備</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>県庁内企画調整課で検討班を組織。</li> <li>現財団職員のうち、県からの派遣:12名、プロパー:3名(役員含む)、派遣・嘱託:16名。企画事業課には、公募で採用した芸術分野の企画業務経験者がいる。</li> <li>自主事業では、県民の需要、ホールの舞台規模等を念頭に置きながら、大分県と二期会等とのつながりを活かしたオペラの上演をはじめ、多様な鑑賞事業を充実させることをコンセプトに、財団内事業担当セクションで企画を行っている。</li> <li>ボランティアのエモスタッフを県民から公募、レセプションistとして活用。</li> </ul>
<p>開館記念事業</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>国民文化祭の開催をもってホールのオープニングとした。</li> <li>財団独自事業として、オープン時の平成10年10月の NHK 交響楽団のコンサートから、翌平成11年の4月のオペラ「トゥーランドット」の公演まで、年度をまたがって大々的に事業を行なった。</li> <li>「トゥーランドット」公演は、東急文化村と共同制作、開館記念事業の最大の目玉として企画した。</li> </ul>
<p>計画づくりにおける 特徴・課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>県立病院跡地再開発として計画、大分県の文化発信拠点、周辺地域の賑わい創出施設としての役割を担う施設。</li> <li>商業施設、ホテル、NHK 大分放送局との複合施設建設であり、F.T.C.グループが建物を建設、NHK と県でそれぞれの専用部分を買取り、商業施設、ホテル部分は F.T.C.グループ所有による賃貸。土地は、県と NHK が保有して F.T.C.グループに賃貸。</li> <li>他事業体との調整や、利用方法に制約のある中での管理・運営が課題。また、ホールとしての事業のみならず、施設全体を活性化する事業づくりに取り組むことが今後の課題。</li> </ul>